



学	主査：作業療法学分野教授 佐竹真次 副査：作業療法学分野教授 佐藤寿晃、副査：看護学分野教授 安保寛明
位	新規性・有効性 パーキンソン病では各種の錯視が生じることは知られているが、どのような種類の錯視がどのような頻度で体験されているのかは、まだ十分に明らかではなかった。
論	本研究では、パーキンソン病患者 40 名に多くの種類の錯視について伝え、そのような症状を体験しているか否かを尋ね、さらにその体験の内容を詳細に聴取した。
文	その結果、パーキンソン病患者 40 名中 30 名が発症後から質問時まで錯視を体験しており、25 人では質問時期にも錯視が継続していたという。報告された錯視は、変形視、複雑錯視、変色視、選択性二重視が多く、その他、テクスチャーの錯視、大視、小視、遠隔視、近接視、動視、失運動視、加速視、減速視、傾斜視、逆転視、反復視がみられたという。従来まで、他の疾患でも報告のない、面の傾きの錯視と考えられる現象もみられたという。これらの錯視のいくつかは患者の日常生活に悪影響を与えている場合もあったとされる。
審	結論として、パーキンソン病患者の診療においては、錯視の有無、内容についての系統的な聴取が重要であるとされた。
査	本研究の新規性は、比較的多くのパーキンソン病患者に系統的なインタビュー法を丹念に用いて聴取したため、既報告の錯視だけでなく、他の疾患でしか報告のない種々の錯視が確認できたことと、いかなる疾患でも報告のない、面の傾きの錯視を発見したことである。また、用いられた系統的インタビュー法は今後の臨床場面にも活用が期待され、有効性も担保されていると考える。
結	信頼性 本研究の信頼性は、本研究がパーキンソン病患者 40 名の標本に基づく研究であり、再現性を担保するためにも、一定の標本サイズを確保していると考えられ、また、研究方法も明確であることである。
果	総評 以上のことから、本研究の論文は博士論文に値するものであると評価し、博士論文審査に合格したと判断した。また、関連する口頭発表・試問を設け、明確な回答が得られた結果、最終試験に合格したと判断した。
要	
旨	